



<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.44 / Fall 2020

会 長 滝浦 真人

事務局 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名: 日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

《特集 語用論研究の新潮流》

語用論研究の新潮流 (3)

歴史言語学、言語の使用実態、会話分析

柴崎礼士郎 (明治大学)

「語用論研究の新潮流」の第三弾を依頼されました。潮流とまでは行かずとも、数年前から小波ほどの動きが私自身の言語的琴線に触れていることもあり、「私の中の新潮流」という内容で執筆することになりました。紙幅制限のため参考文献は最小限に止めますが、ご関心のある方はご連絡ください。

語用論の定義を確認するために、学習用辞書類を紐解いてみました。執筆者により「語、文、発話、使用者の意図」など考察対象が異なるものの、「実際の使用場面や文脈」という点では概ね解釈が一致していました。この点については語用論に限らず、言語学という学問自体「正誤よりも使用実態に関心がある」(加藤 2014: 30) という見解もあります。歴史言語学では、再建などの幾つかの例外を除けば言語の使用実態を観察することが定石で、原文の誤読誤解などは「改悪 (corruption)」(あるいは広義に banalization) と見做されたりもします。勿論、言語の発達は推論、類推などによる刷新、変異、誤用の面もありますが、それには大本の使用実態が存在したからだと思えます。その意味で、語用論的考察は古くから歴史言語学の一部であり、歴史語用論や

歴史会話研究という用語が広まる前から、時代を問わず言語の使用実態を観察することは当然のこととと思っていました(柴崎 2019)。「古英語散文の統語構造を調べてみると、色々な意味で、現代英語の書きことばというよりは、むしろ話しことばと共通点が多い」と述べる Brook (1973: 115)へも共感でき、話しことばや書きことばという一面的な区分にも、駆け出しの一言語学徒の頃から違和感を抱いていました。

一方で、21世紀に入る頃から、会話分析(CA)研究の一部が歴史言語学へと小波のごとく押し寄せて来るのを感じていました。実際のところは、古い時代の言語文学を研究する方々が、CAの手法を大胆に援用し始めていたとすべしかもしれません。例えば、CAで著名な John Heritage氏が認める oh の複数の機能が、シェイクスピアの作品に全て確認できると言う報告があり (Person 2009)、現存するテキストの句読法を比較参照精査して、シェイクスピア演劇から当時の「話者交替/順番交替 (turn-taking)」を分析するという刺激的な取り組みもあります (Morgan 2019)。前掲書を通して、文学研究の中でも発話の省略研究などが多々存在することも知り得ました。

歴史言語学に足を踏み込んだ者として、この CA との学問的コラボレーションへの期待は小さくありません(理由は後段)。「IPrA's John J. GUMPERZ LIFE-TIME ACHIEVEMENT AWARD」の栄えある第 1 回目の受賞者に選ばれた Sandra A. Thompson 氏らの影響もあり、CA は複数の方面で新たな活気に溢れているからです。少し遡

ると、20 世紀末には歴史言語研究の中で量的・変異的アプローチが一つの潮流となり、William Labov 流の社会言語学の影響下にあったことが明らかです。21 世紀を迎える頃になると、社会言語学では Barbara Johnston 氏らが質的研究を前面に押し出し、Penelope Eckert 氏らにより遂行されています（‘third-wave’も忘れてはなりません）。更に言うと、より局在化した共同体（i.e. community of practice）や、そうした共同体で言語実践を繰り返す個々の話者へも関心が向いてきており、こうした社会言語学的アプローチは CA との相性が良さそうです。

私は CA を生業としませんので、情けないことに歴史言語学、会話分析、社会言語学（あるいは、それ以上の領域横断的な）コラボレーションの研究史を熟知していなかったのかもしれませんが。会話を談話の一種とし、談話分析のためのサブコーパス的存在と感じていました。しかし、思い起こせば、本学会とも縁深い Jonathan Culpeper 氏らの研究を見ても CA への接近は十分に見て取ることができ、精緻な現代語研究の成果を過去のことばの実態観察へ応用して、何らかの知見を得ることは十分に可能であることが明らかになってきています。語用論や談話分析の学問的妥当性を再認識するためにも、CA をより真剣に勉強するべきという「うねり（新潮流）」が私の中にあります。

歴史言語研究は世界的に研究者離れが散見されており、このことは過去 15 年余りの関連国際学会の動向を見ても否定できません。昨今、業績主義が重要視され、とりわけ若手研究者や大学院生は基礎研究へ時間を割けない環境にあると思えます。現代語研究だけでも、お馴染みの音韻論や形態論から社会言語学や談話会話分析まで幅広い学習が必要とされ、読むべきジャーナルも増加の一途を辿っています。このような共時態への努力を通時態へ深めていくとなると、全体像を掴むために更に膨大な時間と労力を費やさねばならず、研究者離れが進むのも理解できてしまいます。歴史言語研究は準絶滅危種に近いと言っても冗談にはならないかもしれません。こうした中で、本学会誌『語用論研究』へは CA 研究に関わりのある投稿論文が徐々に増えている印象を受けます（ただし、査読者への謝辞はエチケットとして忘れずに書きましょう！）。CA と語用論は互いに領海侵犯しているのではなく、相乗効果を模索する自然な流れなのかもしれません。上述の社会言語学と CA の接近も無視できません。歴史言語研究に従事する者は、その名称が何であれ（e.g. 歴史語用論、歴

史会話研究、歴史社会言語学）、少しでも学問的な熱気を共有していただきたいはずで

す。翻って考えてみますと、言語研究の目的とは何でしょうか。その一面を、過去の蓄積に基づき現在を理解して未来を切り開くことだとすると、その方法論は「積分型」でしょう（荻谷・吉見 2020: 169-170）。どうやら私の研究の多くは積分型だったようです。英語史の各時代に特有な表現を観察し、規範（precept）と使用実態（usage）の乖離や史の変遷の理解を深めるには、蓄積された資料を最大限に活用しなければならないからです（e.g. 渡辺・柴崎 [準備中]）。一方で、今流行りの「断捨離」は、簡素化の極限を求めるという意味では「微分型」と言えそうです（思い切りの良さはライブニッツの考えと重なります）。しかし、「言語の世界では断捨離はできない」（小倉 2019: 239）ことは、唯一無二の史的資料や会話データの価値を知る者には否定できません。言語は継続されています。英語には史的資料が豊富に存在するからこそ、上述の学問的コラボレーションが蜜月に至った可能性も否定できません。

まだまだ書き切れないことが多々あることに気付きましたが、字数制限には敵いません。別の機会を模索したいと思います。

参考文献

- Brook, George L. 1973. *A History of the English Language*, revised edition. Tokyo: Nan'un-do.
荻谷剛彦・吉見俊哉 2020. 『大学はもう死んでる?』集英社。
加藤重広 2014. 『日本人も悩む日本語』朝日新書。
Morgan, Oliver. 2019. *Tum-Taking in Shakespeare*. Oxford: OUP.
小倉孝保 2019. 『100 年かけてやる仕事—中世ラテン語の辞書を編む』プレジデント社。
Person, Raymond F., Jr. 2009. ‘Oh’ in Shakespeare: A Conversational Analytic approach. *Journal of Historical Pragmatics* 10, 84–107.
柴崎礼士郎 2019. 「監訳者解説」ジョン・バイビー（著）小川芳樹・柴崎礼士郎 [監訳] 『言語はどのように変化するのか』pp.400–415. 開拓社。
渡辺拓人・柴崎礼士郎（編）[準備中] 『英語史における定型表現（仮）』開拓社。

*** 日本語用論学会第 23 回大会ご案内 ***

2020 年度の第 23 回大会は、新型コロナウイルス感染症対策のため、オンライン開催となります。多くの会員の皆様からの研究発表のご応募をいただき、口頭発表 26 件、ポスター発表 7

件、ワークショップ3件の合計36件が採択となりました。プログラムの詳細は会員メーリングリスト、学会公式ホームページにてご確認ください。

◆日程：2020年11月28日（土）、29日（日）
◆会場：Zoom オンライン・特設サイト
◆参加費（事前登録）：一般会員1,000円 学生会員無料 非会員は一般・学生とも1,000円
※参加費の入金方法・参加資格の付与方法については現在、準備中です。参加申し込み期間は11月上旬～11月20日（金）を予定しています。準備ができ次第、会員メーリングリスト等でお知らせします。

◆大会テーマ

「おしゃべりな私たち：

Keep doing pragmatics!」

◆主なプログラム

《11月25日（水）～29日（日）》

口頭発表オンデマンド方式・ワークショップの発表動画、並びにポスター発表のポスターを第23回大会特設サイトにて公開します。

特設サイトの詳細については参加手続きをした方にお伝えします。

《11月28日（土）》

9:30～11:25：ワークショップ質疑ライブ

9:30～15:50：口頭発表リアルタイム方式

11:35～15:05：口頭発表オンデマンド方式

・ポスター発表質疑ライブ

(12:10～13:10：休憩60分)

15:10～15:30：会員総会

15:40～16:40：会長就任講演 滝浦真人会長

16:45～17:45：特別講演 井出祥子先生

18:00～：懇親会（詳細は後日発表します）

【会長就任講演】

「日本語にイン／ボライトネス研究が必要なわけ」

日本語用論学会会長 滝浦真人放送大学教授

【特別講演】

「場の語用論—パラダイムのハイブリッドを求めて」

日本女子大学名誉教授 井出祥子先生

《11月29日（日）》

9:30～12:10：口頭発表リアルタイム方式

9:30～12:30：口頭発表オンデマンド方式

質疑ライブ

12:30～13:30：休憩60分

13:40～16:40：シンポジウム

16:45～16:55：閉会式

【シンポジウム】

テーマ：会話分析の基軸と展開
相互行為における認識性

早野薫先生（日本女子大学）

子ども（非定型発達児を含む）の相互行為

高木智世先生（筑波大学）

日本語教育におけるCA

岩田夏穂先生（武蔵野大学）

相互行為における身体資源

城綾実先生（早稲田大学）

【口頭発表の方法】

発表者は以下の2方式のいずれかを選択します。

①オンデマンド方式（収録動画+質疑ライブ）

〔収録動画〕発表者が事前に収録し、学会に提出した口頭発表の動画（25分）を11月25日（水）までに学会公式ホームページに掲載します。

大会参加手続きをした方は視聴が可能となり、文字掲示板に質問を記載することができます。

〔質疑ライブ〕大会当日に質疑応答（15分）をZoomオンラインにて行い、事前に記載された質問および当日の質問に発表者が回答します。

②リアルタイム方式（発表・質疑ともライブ）

発表者は口頭発表と質疑応答（合計35分）を、大会当日にZoomオンラインにて行います。

大会参加手続きをした方にZoomオンラインのURLをお知らせし、視聴が可能となります。

【ワークショップの方法】

口頭発表のオンデマンド方式に準じて行います。〔収録動画〕発表者が事前に収録し、学会に提出した各発表の動画（合計80分）を11月25日（水）までに学会公式ホームページに掲載します。大会参加手続きをした方は視聴が可能となり、文字掲示板に質問を記載することができます。

〔質疑ライブ〕大会当日に質疑応答（35分）をZoomオンラインにて行い、事前に記載された質問および当日の質問に発表者が回答します。

【ポスター発表の方法】

発表者が指定書式で作成し、学会に提出したポスターを11月25日（水）までに学会公式ホームページに掲載します。大会参加手続きをした方は閲覧が可能となり、文字掲示板に質問を記

載することができます。質疑応答は以下の2方式のいずれかを選択します。

①文字掲示板のみ

発表者は文字掲示板の上のみで質問に対する応答を行います。

②文字掲示板+質疑ライブ

大会当日に質疑応答(15分)をZoomオンラインにて行い、事前に記載された質問および当日の質問に発表者が回答します。

【発表賞について】

例年の通常開催と同様、口頭発表、ポスター発表において事前に発表賞の審査を受けることを申告している発表者が対象となります。

口頭発表においてはオンデマンド方式、リアルタイム方式の区別なく、対等に審査します。

ポスター発表においては大会当日の質疑ライブも審査対象となります。

◆No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず大会運営委員会に断りなく、①事前に収録動画(ポスター)を提出しなかったオンデマンド方式の発表者(ポスター発表者)、②大会当日にZoom会場に入室せず、発表及び質疑応答を行わない両方式の発表者(ポスター発表の質疑ライブ選択者)は、これらを「No Show」とみなし、学会ホームページにて公表します。ただし、事前、または、当日に(やむをえない場合には事後に)、発表を行えない(行えなかった)合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

*** 地区研究会コーナー ***

◆関東地区研究会

関東地区研究会では、下記のような講演会を予定しております。皆さまふるってご参加ください。

【演題】「カルペパーとホーの『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ』: この本は、どこがどう新しいのか?」

【話し手】 椎名美智先生 (法政大学)

【聞き手】 滝浦真人先生 (放送大学)

【日時】 2020年12月20日(日)14時~16時

【場所】 ZOOMで実施。要事前予約。

【概要】 この夏、カルペパーとホーの『新しい語用論の世界』という共訳本を出版しました。共訳者の欄に、元学会長の加藤重広先生と現学会

長の滝浦真人先生のお名前が並ぶ、とてもゴージャスな本です。タイトルに「新しい」とあるのですが、どんな新しいこと、面白いことが書かれていますでしょうか? 翻訳しながら、「ここは新しい」「ここはこれまでの語用論と違う」「ここは面白い」と思った部分を取り上げて、共訳者の滝浦先生とトークしながら紹介していきたいとします。副題に「英語からのアプローチ」とあるので、「日本語からのアプローチ」についても、考えてみたいと思います。すでに読んだ方も、これから読む方も、どうぞいらしてください。翻訳の裏話もちょっとだけお話しできればと思います。

*** 委員会より ***

★『語用論研究』編集委員会より

『語用論研究(S/P)』第22号(2020)は、現在、鋭意編集中です。会員の皆様には、このコロナ禍の中、論文の投稿のご協力を願い、ありがとうございました。様々な状況を考え、本号は、締め切りを当初より一ヶ月延長しました(5月31日締め切り)。おかげさまで、今までになく応募数が多く、25本(うち研究ノート4本)の応募がありました。そのうち、何本が最終的に掲載になるかはまだ未定ですが、現在、第1回目の査読作業を終え、再査読にかかった論文を選定し、修正をお願いしているところです。意欲的な論文が集まるとしますので、今号の刊行(来年3月末)をお待ちください。

以下の表は、前任の滝浦編集委員長から引き継ぎました、過去5年間の応募数と採択数です。参考までにご覧ください。

S/P 号数 (年度)	応募数	採択数	採択率
S/P 17 (2015)	14(11+3)	3(2+1)	21.4%
S/P 18 (2016)	13(9+4)	3(2+1)	23.1%
S/P 19 (2017)	19	5(3+2)	26.3%
S/P 20 (2018)	9	2(2+0)	22.2%
S/P 21 (2019)	18	5(5+0)	27.8%
S/P 22 (2020)	25(21+4)		

* 応募数、採択数の()内は、(研究論文+研究ノート)の

応募数の多寡はその時々状況によると思われるますが、ほぼ 20%台の採択率となっております。また、「支える・育てる」学会誌、「ダメ出しの査読」から「提案の査読」へを標榜し、査読コメントも、細かく、詳しいコメントを、査読の先生方をお願いしています。それに伴って、「査読方針」を明確にし、応募しやすい学会誌を模索しているところでもあります。詳しくは S/P 第 21 号 (2019)の最後のページをご覧ください。

ここ数年にわたり、各大学では、研究倫理研修などが実施され、研究者に対する社会的責任を明確にする動きが大きくなっています。それに伴って、それぞれの学会、学会誌の責務も大きくなってきています。従来から、学会誌で規定している様々な制約（剽窃、二重投稿、不適切な自己引用、サラミ論文などの禁止事項）に加えて、今後は、学会誌そのものの価値も大きく問われようとしています。学会誌に書かれた論文の引用率なども、目に見える、あるいは見えない形でも問われてきています。学会側としては、なるべく丁寧に投稿論文を見るという役割だけではなく、掲載された論文が、いかにインパクトを与えるか、といったその先を見通した学会誌作りが求められています。書きっぱなし、載せっぱなしでは、発展はありません。ご自分の興味範囲、専門分野に限らず、まずは、学会誌をじっくり読み、議論をしたりフィードバックをする、また作り手も、もう一度改めて読みながらフィードバックを求めるといった段階が必要のように思われます。

このコロナ禍の中、人とのつながりがますます少なくなっていく時代を迎えています。本学会誌が、その苦境を乗り切る、一助となってくれば幸いです。

(文責：編集委員長・田中廣明)

★大会運営委員会プロシーディングス担当より

日本語用論学会では、2005 年度第 8 回大会より『大会発表論文集』を発行しておりますが、2019 年度第 22 回大会の論文集は、本年 6 月に学会のホームページで公開されました。

掲載された論文数をご報告いたします。

研究発表（日本語）21 本

研究発表（英語）3 本

ワークショップ発表（日本語）10 本

ワークショップ発表（英語）該当なし

ポスター発表（日本語）4 本

ポスター発表（英語）該当なし

合計で 38 本が掲載されました。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございました。

(竹田らら)

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員 6,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 7,000 円です。よろしくお申し込み申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会費専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室

E-mail: psj@outreach.jp

★激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、「令和 2 年梅雨前線豪雨等による災害」（激甚災害指定）による被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2020 年度会費」ならびに「2020 年度年次大会の参加費」を免除いたします。被災地の皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局

〒448-8542

愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 北野浩章研究室内

E-mail: secretary@pragmatics.gr.jp

★《新刊・近刊案内》★

- 『英日翻訳の技術』鍋島弘治朗（著・編）・ブルックス マイケル（著）くろしお出版（定価 1,800 円＋税）



本書は、言語を置き換えても成立しない、一筋縄ではいかない翻訳の世界を、豊富な具体例とともにわかりやすく解説している。冒頭では翻訳者の心得や必要な下準備について書かれているため、翻訳者を目指す人にとって役立つことは間違いないが、翻訳者を目指す人でなくても、興味深く感じられる一冊である。特に、第2章の「優れた翻訳とは」では、優れた翻訳を実現するためのプロセスが図解され、翻訳作業の奥深さが伝わってくるので、言語の営みに関わる全ての人にとって興味深い。

翻訳技術が身につくよう、練習・演習問題や翻訳課題も盛り込まれており、模範解答もついているため、実際に問題を解いた後、自分の解答と見比べる楽しさも与えてくれる。対話式の Q&A コーナーでは、読み手が素朴に持つ疑問を代弁する質問者と、それに丁寧且つ簡潔に答える回答者のやりとりが繰り返され、気になるポイントや、気にしたことがあるけれど解決したことのない疑問がすっきりと解決する爽快感がある。（2020.6.1 刊）

- 『新しい語用論の世界－英語からのアプローチ』ジョナサン カルペパー・マイケル ホー（著）椎名美智（監訳）・加藤重広・滝浦真人・東泉裕子（訳）研究社（定価 5,000 円＋税）



と感じられる。また、この日本語版のためだけに書かれたまえがきによれば、副題の「英語からのアプローチ」からもわかるように本書では英語のデータを用いて概説するわけだが、英語以外の言語の語用論について考える刺激を与えるこ

本書は、2014 年に刊行された *Pragmatics and the English Language* の全訳である。「語用論の入門書」と位置づけられているものの、基礎知識から専門的な知識まで与えてくれる。各所に盛り込まれたコラムは豊富な事例が盛り込まれ、ここ

とを願った書だという。どの言語を研究対照としている研究者にとっても興味深く学べ、且つ、日本語版であることで日本語に染みのある読者ならば、より身近に感じながら読み進められる 1 冊である。

- 『共同注意場面による日本語指示詞の研究』平田未季（著）ひつじ書房（定価 6,400 円＋税）



日本語の指示詞について、相互行為における共同注意に焦点を当て行った指示詞研究がまとめられた研究書である。3 部で構成されており、まず 1 部では先行研究を検討し、わかりやすく問題点と解決方法を提示している。そして、2 部の意味論分析、第 3 部の語用論分析を経て、日本語の指示詞を豊かに記述している。これまでの日本語学・国語学における指示詞研究に残された課題に対し、近年 Levinson らが提示した意味記述概念に関する研究や、談話データの中の共同注意の場面での指示詞の分析など、新しい試みを統合した、指示詞研究における重要な成果を示した書である。（2020.2.20 刊）

- 『日本語語用論フォーラム 3』加藤重弘・滝浦真人（編）ひつじ書房（定価 5,000 円＋税）



日本語研究と語用論研究の「研究活動が集う広場」を提供するシリーズの第 3 巻である。

日本語の現象を研究者がそれぞれの視点から捉えた 9 本の論考が納められている。これらは、メタファー、疑問表現、ベネファクティブ、授与動詞、形容詞連用修飾を扱う論考や、会話データを用いてインターアクションを分析した論考、日常会話によく生起する語に関する構文の観点からの分析を示した論考など、多様であり、「広場に集う」ことで、読者に日本語について様々に思いを巡らせ、思考を活性化させる機会を提供する。読み進めると、語用論の楽しさを改めて感じさせるものでもあり、また拓かれた学問の在り方を見せてくれるものでもある。刺激的な 1 冊である。（2020.3.30 刊）

読者に日本語について様々に思いを巡らせ、思考を活性化させる機会を提供する。読み進めると、語用論の楽しさを改めて感じさせるものでもあり、また拓かれた学問の在り方を見せてくれるものでもある。刺激的な 1 冊である。（2020.3.30 刊）

- 『動的語用論の構築へ向けて 第2巻』田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝(編) 開拓社 (定価 3,800 円+税)



本書は「動的語用論」という新分野を切り開く試みの第二弾である。「はじめに」では、Du Bois や Couper-Kuhlen らの近年の研究も踏まえながら、動的性質へ着目することで、言語は認知・社会・思考・経験を動かす「資源」であり、また認知・社会・思考・経験は言語を動かす

「駆動源」であるとする言語観を明示し、さらに深化した動的語用論で読者を魅了している。第1巻から続く「歴史語用論・文法化」と「理論と実証」に加え、「言語獲得・実験心理学」、「談話分析・相互行為言語学」、「文脈」の3部が加えられ、全12本の論考が納められている。第1巻発刊以降、ますます活気づく展開を見せている。(2020.7.26刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ウィズコロナの時代となり、オンライン授業やオンライン学会が私たちをとりまく「日常」になりつつあります。しかし、工夫次第で意外とどのようなことでも成立してしまうオンラインはありがたいツールですが、そろそろ画面越しにししか会えない全国の研究者の皆さんとお会いしたい今日この頃です。(秦かおり)

■学会活動や授業でオンライン・オンデマンドに慣れたころ、新学期になりハイフレックス授業

が始まり、また新しい経験を重ねています。今年は、予想外に学びの多い年で、充実しているという見方もできますが、やはり対面での学会開催・授業が実現する日が早く来ることを願っています。(野村佑子)

~~~~~  
日本語用論学会 Newsletter 第44号  
発行：日本語用論学会広報委員会  
発行日：2020年11月1日

#### [広報委員会]

- \* 委員長：秦かおり
  - \* Newsletter 編集担当：野村佑子
  - \* 公式ホームページ担当：横森大輔
  - \* 会員メーリングリスト担当：八木橋宏勇
- E-mail: [webmaster@pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster@pragmatics.gr.jp)